

授業の学びが「非定型問題」の思考に与える影響

澤本 恭

鳥取大学附属中学校 社会科

E-mail: sawamoto-k@tottori-u.ac.jp

SAWAMOTO Kyo(Tottori University Junior High School): Influence of class learning on the thinking of "atypical problems"

要旨 - 協同的探究学習の手法を用いて「非定型問題」について考察する授業を実践してきた。この授業の基本的な過程は、個別探究、協同探究、再度の個別探究という流れが基本となる。このプロセスの中で、思考の深まりに大きな影響を与えるのが、最初の個別探究ではないかと考えた。協同探究において、知識の関連付けを通して概念を獲得するためには、個別探究の場面で多様な見方や考え方の意見が出てくることが求められる。そこで、「やりくり」授業を充実させるために、日々の授業での学びが、生徒の見方・考え方にどのような影響を与えるのかという点について分析を試みた。その結果、授業の中で提示した統計資料・グラフ等のデータに基づいて思考する生徒、教科書の情報を中心とする授業での学びに基づいて思考する生徒が一定数見られた。また、授業を通して既習の知識が呼び起こされたり、新たな情報を自ら調べたりする姿も見られ、改めて日々の授業が生徒の思考に与える影響の大きさを確かめることができた。

キーワード 非定型問題, 個別探究, 深い思考

Abstract — I have practiced classes to consider "atypical problems" using the method of collaborative inquiry learning. The basic process of this class is based on the flow of individual inquiry, cooperative inquiry, and individual inquiry again. In this process, I thought that the first individual inquiry would have a great influence on the depth of thinking. In order to achieve concept discovery through knowledge association in collaborative inquiry, it is required that diverse viewpoints and ideas emerge in individual inquiry situations. In order to enrich "YARIKURI" classes, I tried to analyze how the learning in the daily class affects the students' way of thinking and thinking. As a result, there were a certain number of students who thought based on data such as statistical materials and graphs presented in class, and students who thought based on what they had learned in class centered on information in textbooks. In addition, we were able to confirm the magnitude of the impact that daily classes have on the students' thinking, as they recalled the knowledge they had already learned and looked up new information on their own through the class.

Key words — atypical problem, individual inquiry, deep thought

1. はじめに

1.1. 問題の所在

鳥取大学附属中学校では、生徒が既存の知識や技能を組み合わせることで未知の問題を解決する活動を「やりくり」と呼んでいる(中尾 2022)。社会科において、この「やりくり」をキーワードとして検討した授業構成の一つとして、必要となる知識を教師が与えて考えさせるのではなく、生徒が日常で得られた知識等を組み合わせ、新たな視点で世界を捉える学習活動が考えられる。

また、藤村ら(2018)は、学力について特定の手

続き的知識・スキルを適用して解決できる力である「できる学力」と、多様な解・解法・解釈などが可能な非定型問題を解決、探究する「わかる学力」の2つに分類している。その上で、「わかる学力」を高めるためには、非定型問題の解決を図り、一人ひとりの子どもが探究を通じて自分自身で知識を関連づける個別探究、クラス内の他者との協同過程を通じて自分や他者のもつ既有知識を関連づける協同探究、さらにそれを活かして一人ひとりの子どもが探究を深める再度の個別探究、のプロセスを組み込んだ学習方法(協同的探究学習)が

有効であると述べている。

以上のことから、「やりくり」と協同的探究学習は、概念的理解を促す手法として同じ目的を持つものであると考えられ、社会科の授業において、協同的探究学習の手法を用いた「非定型問題」について考察する学習活動を取り入れた授業を実践してきた。この授業の基本的な過程は、個別探究、協同探究、再度の個別探究という流れが基本となるが、特に最初の個別探究が生徒の思考の深まりに大きく影響を与えるものだと考えられる。なぜならば、協同探究の醍醐味は、個人から出された多様な見方や考え方を関連付けて新たな概念を発見するところにあると考えられるが、それは個人から多様な見方や考え方の意見が出るという前提で成り立っていると言える。もちろん、「やりくり」場面で活用される既有的知識は、授業の学びだけではなく、生活全般の中で身に付けた知識を想定しているわけだが、やはり日々の授業での学びが占める割合は決して低くはないと考えられる。「やりくり」授業を充実させるためには、日々の授業での学びが、生徒の見方・考え方にどのような影響を与えるのかという点について分析する必要がある。

1.2. 研究の目的

学習指導要領によると、地理的分野の「日本の諸地域」の単元は、5つの考察の仕方を基にして、空間的相互依存作用や地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、知識、思考力・判断力・表現力等を身に付けることができるよう指導するとされている。そこで、学習する地域(九州地方、中国・四国地方など)ごとに、その地域の学習を通して考察する「非定型問題」を設定し、生徒の思考が授業前後でどのように変化したのかという点について考察し、授業の学びが生徒の見方・考え方にどのような影響を与えているのかということを、生徒のワークシートの記述をもとに分析することにした。分析を通して、授業場面のどのような発問や、どのような学習活動が生徒の見方・考え方を刺激するのかを探っていきたい。

2. 研究の方法

2.1. 対象と研究の手続き

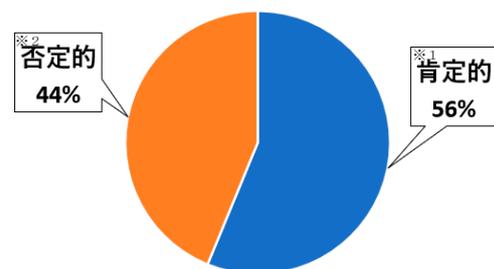
鳥取大学附属中学校の2年生4クラス(136名)を対象とした。各地域の学習を始める前に、「非定型問題」に対する各自の考えをワークシートに記入させた。そして、その地域の学習を終えた時に再度「非定型問題」について自分の考えをワークシートに記入させた。今回の「非定型問題」は、肯定的立場か、否定的立場かを明らかにした上でその理由を述べる形とし、賛成、反対の立場の変化でグループ分けをし、次に示す(A)～(D)の各グループの思考の変化について分析することとした。

- (A) 授業前: 肯定的, 授業後: 肯定的
- (B) 授業前: 肯定的, 授業後: 否定的
- (C) 授業前: 否定的, 授業後: 肯定的
- (D) 授業前: 否定的, 授業後: 否定的

2.2. 授業実践

地理的分野の第3章『日本の諸地域』第2節「中国・四国地方」の授業において、「山陰新幹線(仮称)の整備は、山陰地方の過疎問題を解決に導くことができるか。」という非定型問題を立て、授業の前後で自分の考えを記述させた。なお、判断のための1つの情報として、九州新幹線の新八代～鹿児島中央が部分開業した際の地域経済への影響についてまとめた資料と、山陰新幹線(仮称)の整備費と時間短縮効果の試算をまとめた資料を提示した。授業前における「非定型問題」に対する生徒の反応をグラフ1に示す。

授業前の「非定型問題」に対する生徒の反応



グラフ1

- *1 肯定的・・・「解決に導くことができる」
- *2 否定的・・・「解決に導くことができない」

第1時	中国・四国地方の自然環境
第2時	交通網の整備と人々の生活の変化
第3時	瀬戸内海の内海と工業の発展
第4時	交通網を生かして発展する農業
第5時	人々を呼び寄せる地域の取り組み

表1

単元計画表を表1に示す。

各時間の授業を通して、非定型問題について考察するための情報を得られるように、交通網の整備状況が人々の生活に与える影響について考える場面を設定した。

第1時の授業では、白地図を活用して自然環境の特色についての理解を深めた。特に、東西にのびる中国山地、四国山地の2つの山地が季節風をさえざる影響で、瀬戸内は年中降水量が少なく、瀬戸内海は日本海や太平洋に比べて波が穏やかで、古くから海運が栄えていたことについて学習した。

第2時の授業では、本州四国連絡橋の開通が人々の生活に与える影響について理解を深めた。移動時間の短縮により、橋を渡って通勤・通学する人が増加したこと、フェリーのダイヤを気にすることなく買い物や通院ができるようになったことなど生活が便利になったことだけではなく、いわゆる「ストロー現象」により、地域経済の衰退が進んだことについても理解を深めた。

第3時の授業では、瀬戸内の工業について学んだ。中国・四国地方では唯一新幹線が整備されている地域であり、新幹線が工業に与える影響についても考察した。鉄道車両を製造する工業が発達しているという直接的な影響だけではなく、西は福岡市、東は大阪市、京都市などの主要都市と結ばれていることが、企業の進出を促す好条件になりうるだろうと考えることができた。

第4時の授業では、第一次産業の特色について学習した。大消費地から距離があるという不利な条件を補うために、瀬戸内や南四国では温暖な気候を生かして高値で取引される端境期に農産物を出荷することで輸送費をまかなう工夫をしていることを学んだ。また、農産物の鮮度を維持して輸送するためには、高速道路網の整備が欠かせないという点や、近年実験的ではあるが、山陰

地方の冬の味覚である「松葉ガニ」を特急列車で京阪神や九州の百貨店に輸送する取り組みをおこなっている事例について学び、交通網が産業に与える影響について理解を深めた。

第5時の授業では、高速道路網の整備が過疎地域の経済活動に与える影響について学んだ。鳥取自動車道の開通により、鳥取県内への観光目的での来県者数が増加したことから、交通網の整備が第三次産業にプラスに働くことや、地域の側でも地域の魅力を発信し、観光客の増加につなげようとしている取り組みについて学習した。また、他地域と同様に、高速道路のインターチェンジ近くに工業団地を整備し、企業の誘致に努めていることも学習した。

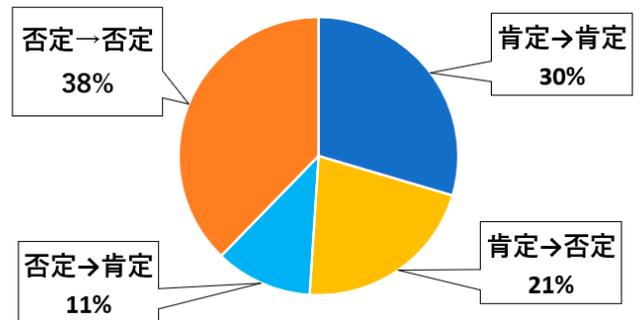
3. 結果と考察

3.1. 結果

授業後における「非定型問題」に対する生徒の反応をグラフ2に示す。

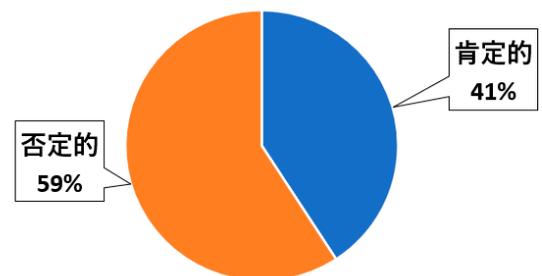
授業前と授業後の変化の内訳をグラフ3に示す。

「非定型問題」に対する授業生徒の反応の変化



グラフ2

授業後の「非定型問題」に対する生徒の反応



グラフ3

3.2. 生徒の記述の分析

肯定→肯定のグループを(1)、肯定→否定のグループを(2)、否定→肯定のグループを(3)、否定→否定のグループを(4)とする。

(1)は、山陰新幹線の整備によって過疎問題を解決に導くことができると首尾一貫しているグループである。このグループに属する3名の生徒の授業前後の記述を表2に示す。

生徒Aの授業前の記述内容は、移動時間の短縮が観光客の増加につながるだろうという内容だった。それが授業後には、授業で扱った「鳥取自動車道の開通と来県者数の変化のグラフ」から、交通網の整備が観光客の増加につながるということを示し、根拠に基づいた記述になっていることがわかる。また、新幹線の開通でより広範囲からの集客が期待できるという記述が見られることから、自動車と比較して新幹線にはより広範囲の移動に利用されるという特性があることを理解した記述になっていることがわかる。

生徒Bの授業前の記述内容は、新幹線通勤が可能になることで、都市部への人口流出を防ぐことができるという内容だった。それが授業後には、都市からの移住促進を進めることが大切という視点に立った上で、その第一歩として観光目的で来県してもらうことの重要性を説明している。そして、

生徒A	前	新幹線が開通することで、利用者が増え、移動時間が短くなる。そうすると、他県から来やすくなり、観光客が増え、産業が活発になるから。
	後	鳥取の例から交通の便がよくなると観光客が増えているので、新幹線が開通するとより遠くの方からより多くの人々が来ると思ったから。また、鳥根にも魅力があるので、新幹線なら多くの人々が来てくれると思ったから。新幹線開通費は、その人達から少しずつ徴収すればよいと思った。
生徒B	前	鳥取から大阪に通勤することができるため、若者が地元から離れるのを防ぐことができる。そして、大阪からも鳥取に移住する人が出てくるかもしれない。(通勤可能なため)
	後	鳥取には観光資源が多く、観光面でもポテンシャルのようなものはあると思う。過疎を解決するにあたってまず鳥取を知ってもらうことが大切だと思う。鳥取への移住手段として圧倒的に自家用車の割合が高い、今の若者は車を持っていない人も多いと思うので新幹線を通すことでそしてゆくゆくは過疎を解決するに至ると思う。
生徒C	前	神戸、大阪に1時間未満で行くことができるので、山陰から都市に移住せずそのまま山陰に残る人が増えて、人口も増えていくと、山陰新幹線の利用客が増えてよい循環ができると思ったから。
	後	鳥取はかにやなしなど鮮度が重要な特産物があるので、新幹線が開通すると、より広い範囲の地域で食べられるから。鳥取砂丘や水木しげるロードや青山剛昌ふるさと館など結構観光スポットが鳥取県全体にあるので、新幹線が開通すると日帰りの観光客が増えると思ったから。

表2

いわゆる「若者の車離れ」を踏まえて、新幹線整備の必要性を記述していることがわかる。

生徒Cの授業前の記述内容も、生徒B同様新幹線通勤を意図した内容であった。それが授業後には、魚介類や農産物の販路拡大のために新幹線が活用できるのではないかと、という内容が見られ、鳥取の産業についての理解を踏まえた記述になっていることがわかる。

次に、(2)は、授業前は山陰新幹線の整備が過疎問題を解決に導けると考えていたが、授業後には解決に導けないと考えが変わったグループである。このグループに属する3名の生徒の授業前後の記述を表3に示す。

生徒Dの授業前の記述内容は、移動時間の短縮が観光業等第三次産業にはプラスに働くであろうこと、地価の安い鳥取に居住しながら大阪に通勤する生活スタイルも広まるのではないかと、という内容だった。それが授業後には、いわゆる「ストロー現象」が起こる可能性を指摘し、交通網の整備が地方経済に与える影響についての理解が深まったことがわかる記述となっている。

生徒Eの授業前の記述内容は、新幹線の開通で大阪が通勤圏内になることにより、地価の安

生徒D	前	整備されることで他の地方からの移動が楽になり、観光客が増えることによって第三次産業にプラスに働き、山陰の魅力に気づいてもらえるから。移動時間の短縮によって土地の安い山陰に住み、大阪への通勤・通学が可能になり、人口が増えるから。
	後	新幹線が開通したとしても、県外から来る人はあまり増えないと思う。県内の人は、大阪などに観光に行きやすくなり、県外の人が来るとしても県内の産業はあまり変わらないと思う。また、サウナはどこでも入れるものなので、観光客を集めるにはちょっと弱いのではないかと。
生徒E	前	新幹線が開通することによって、大阪や京都などに行きやすくなる。そして、地価が安いから、大阪などに通う人が出てきて、人口増加につながると思うから。
	後	一家に一台は車がある現在の世の中で、新幹線を利用する人はかなり限定されると考えられるから。その中でも国の多額の予算を使うのは無謀だと考えるから。
生徒F	前	鉄道を利用する人も増えているし、所要時間の短縮や既設新幹線との直通運転によって、他地域との広域的な交流の促進・活性化が図れる。そして、便利になった鉄道が山陰を訪れる新しい人の流れを生み出し、交流人口が増加する。さらに、新幹線駅を中心とした周辺の開発により、魅力的な街の形成が期待できる。オフィス・商業施設等の新規立地など経済活性化が期待できると思ったから。
	後	新幹線がなくても、航空機や高速道路があるので、新幹線のような高い建設費のかかる移動手段を選ばなくてもよいと思うから。山陰新幹線を鳥取に整備すると、今使っている汽車(在来線)が別の路線になって登下校が困るから。

表3

い鳥取への移住が進み、過疎問題の解消につながられるという内容だった。それが授業後には、建設費用と経済効果を予測し、他の交通手段の発達状況を踏まえると投資に見合った経済効果を期待することは難しいという考えを記述しており、単に効果がある手段かどうかという視点だけではなく、費用対効果を新たな視点として考えるようになったことがわかる。

生徒 F の授業前の記述内容は、交流人口の増加が見込め、総合的に勘案して経済の活性化が期待でき、その結果として過疎問題の解消につながられるというものだった。それが授業後には、他の交通手段の整備状況を考慮して、費用対効果が望めないという点を指摘するとともに、並行在来線の存廃問題にも触れるなど、「地域住民の日常生活を豊かにする道具となり得るのか」という視点に立って考えるようになったことがわかる。

次に、(3)は、授業前は山陰新幹線の整備は過疎問題を解決に導けないと考えていたが、授業後には解決に導けると考えが変わったグループである。このグループに属する3名の生徒の授業前後の記述を表4に示す。

生徒 G は、授業前は整備された地域に対する費用対効果で判断していたことがわかるが、授業後には、災害への備えという視点から、整備の効果は日本全国に及ぶという考え方に変わったことがわかる。

生徒 H は、授業前は転入よりも転出超過になる

生徒 G	前	九州新幹線の場合、新幹線を開通させたことによる影響が少ない上に、山陰地方の場合は、人口の割に整備費用による国の負担が大きく、プラスの影響がより少ないと考えられるから。
	後	山陰両県には魅力があるから、交通網の整備により観光客が増え、移住してくる人も増えるから。また、太平洋側で大規模災害(南海トラフ地震など)が起きた時の予備の交通手段として使えるから。
生徒 H	前	都市部から地方への就職や通学などの幅が広がり、行くけれども、新幹線で行ける距離なら他県から移住してくることはないと思うから。逆に、地方から出ていく人が今より多くなる可能性があるから。
	後	知事が頑張って山陰の魅力を発信しているから、遠くの地域で気になっていた人も訪れやすくなり、観光客や移住してくる人が増えるから。さらに、若者は今でも進学や就職で都市部へ出て行っているから、新幹線整備によって逆に戻ってくる可能性が高くなるから。
生徒 I	前	中国地方は観光資源が少ないことから、来たいと思う人が少ないと思うから。
	後	山陰地方だけではなく、他の地域への影響を考えると、整備した方が日本の発展につながると思う。日本の人口の偏りも少しは解消されるだろう。

表4

と考えていたことがわかるが、山陰地方では高速道路網の整備だけではなく、地域の魅力づくりやその発信にも力を入れていることを学び、いくら報発信をしても移動手段がなければ来県者を増やすことは難しいという考えに至ったことがわかる。

生徒 I の授業前の記述は、整備地域の観光客数を増やせるかどうかという内容だったものが、授業後には、他地域への影響や日本全体の人口分布に与える影響に触れるなど、該当地域だけではなく広い地域に目を向けるようになったことがわかる。

最後に(4)は、山陰新幹線の整備によって過疎問題を解決に導くことはできないと首尾一貫しているグループである。このグループに属する3名の生徒の授業前後の記述を表5に示す。

生徒 J	前	鳥取には大企業が無い、仕事を目的に利用する人が多いとは思えない。また、沿線人口120万人に対して3兆円を使うのは、必要経費と収益との釣り合いが取れなくなる可能性があると思う。
	後	「県外観光客の移動手段の推移」の資料をみると、観光客の増加に伴って増えているのは主に自動車利用の観光客で、列車利用の観光客数はほとんど変化がなかった。新幹線開通＝観光客の増加には繋がらないのではないかと考えたから。また、新幹線が開通しても山陰にくる動機がなければ、観光客はやって来ない。来たい人は既に来ていていると思う。山陰自体に魅力のあるものを作らなければならない。
生徒 K	前	・仕事で来る人が増えても移住はしない ・新幹線に依存して観光客の日帰り化 ・企業への影響が少ない→活性化に繋がらない ・逆に鳥取や島根から人が流出するのでは？
	後	進学や就職のために都市部へ流出した人が多いなら整備をしても人は帰ってこず、逆に転出する人が多くなると思った。また、過疎化が進んでいる地域が多く、あまり公共交通機関が発達していない(便が少ない)ため、整備されてその地域に短時間でいけるようになってもそこから先の移動手段が少ないため人々は自動車で訪れると思う。結果新幹線の利用者は少なく整備費だけが多くなってしまおうと思う。
生徒 L	前	山陰新幹線の整備によって関西圏に行きやすくなると思うが、関西圏から山陰に来るのは少ないと思う。山陰からは仕事の目的や観光で行く人も多いと思うが、関西の方が圧倒的に都会なので仕事の目的でくるのも少なく帰省で利用するのが多いと思うし、資料に載っていたようにサービス業などもあまり影響を受けていないという回答が多く年間利用者が3年目には少し減少していたので、人が来るかもしれないが観光業などにも力を入れないと厳しいと思った。
	後	今のまま山陰に新幹線を開通しても大阪などの都市部から移住してくる人は少ないと思う。なぜなら都市部に行けば色々な産業や観光客が発展しているため新幹線を開通させたら山陰から短時間で移動出来るようになり逆に出て行く人の方が増えると思うので観光業にも力を入れないと厳しい。またそれを開通させるために莫大な費用を使うよりも観光業に使ったり、山陰の気候などを生かして愛媛のように品種改良などを重ね特産物を新たに作るなどそういうことに使った方がいいと思う。

表5

生徒 J は、授業の前後ともに、提示された資料のデータをもとに判断していることが記述からわかる。その上で、交通網の整備よりも地域の魅力創出の方が優先順位は高いのではないかという自分の考えを述べている。

生徒 K は、授業の前後ともに、転入よりも転出超過になるだろうということを一貫して主張していることに加え、授業後には、山陰地方の公共交通機関の整備状況を踏まえ、来県的手段として新幹線よりも自動車を選択されるだろうという自分の考えを述べている。

生徒 L は、授業の前後ともに、転入よりも転出超過になるだろうということを一貫して主張している。

そして、授業後には、新幹線の整備費用を地域の産業の育成に充てる方が過疎対策としては有効なのではないか、という考えを述べている。

3.3. 考察

生徒の見方・考え方を刺激する授業場面や発問について、生徒の記述をもとに整理した。

(i) 提示された統計資料から判断

生徒 A、生徒 J の記述から見られた。「県外観光客の移動手段の推移」という授業で提示した統計資料のグラフをもとに自分の考えを述べている。今回のような意見が二分されるような「非定型問題」について考察する場合は、どちらかの考えに誘導するような資料にならないよう、提示資料の選定に特段配慮する必要がある。

(ii) 本単元の学び

生徒 C、生徒 D、生徒 H、生徒 L の記述から見られた。生徒 C は特急列車を利用した松葉ガニの輸送の例をもとに、生徒 D、生徒 H は第 5 時の学習内容をもとに、生徒 L は第 4 時の学習内容をもとに考えている。特に、生徒 L は愛媛県の取り組みを山陰地方でも実践できないものかと検討しており、知識を活用していることがわかる。

(iii) 自ら得た知識・自らの生活体験

生徒 A、生徒 B、生徒 C、生徒 F、生徒 H、生徒 K の記述から見られた。本単元の場合、居住地域

を扱っている関係上、生活体験から得た知識と本単元での学びを区別することは厳密には難しい。しかし、生徒 A、生徒 C が記述している新幹線を使えば自動車よりも広い範囲から集客できること、生徒 B が記述している若者の自動車所有率が低下していること、生徒 F が記述している並行在来線の存廃問題などについては、授業では触れておらず、自ら得た知識と言ってもよいと思われる。自ら得た知識を活用することで、思考に広がりが見られることがわかる。

(iv) 以前の社会科の授業での学び

生徒 G、生徒 I の記述から見られた。生徒 G の大規模災害発生時の代替輸送手段が必要という考え方は、「建物や橋を地震の揺れに強くする対策が行われている」という以前に学んだ知識を活用したものと思われる。

(v) 費用対効果という考え

生徒 E の記述から見られた。この考え方は、いわゆる「効率と公正」につながるものである。限られた時間や財をどのように分配するのが望ましいのか、という考え方は、公民的資質を育むためにも大切にしなければならないものと思われる。

4. 終わりに

本実践では、中単元の前後で「非定型問題」に対する生徒の思考が、どのような要因で変化したのかという点について考察した。授業の中で提示した統計資料・グラフ等のデータに基づいて思考する生徒、教科書の情報を中心とする授業での学びに基づいて思考する生徒が一定数見られ、改めて日々の授業が生徒の思考に与える影響の大きさを確かめることができた。また、直接授業では触れていない知識や情報は自ら調べたり、生活体験から得たりしたものと思われるが、中には授業を通して呼び起こされたり、新たに獲得したりしたものもあると考えられる。

今回は個人の思考の変化に焦点を当てて調査したが、思考の変化と思考の深まりは同じではない。中学校学習指導要領解説総則編では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

の視点の1つとして、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう『深い学び』が実現できているか」という視点」という内容を示している。このことを踏まえると、今回の授業で取り組んだ個人の思考を、協同思考を通してより深めるためには、知識を相互に関連付けて理解することや情報を精査して考えを形成するということが特に重要になってくると考えられる。今回取り上げた生徒の記述内容から具体例を挙げると、観光目的での来県者が多く利用すると思われる交通手段として、「若者の車離れ」を理由に新幹線利用が多いと判断する立場と、自動車の普及率から自動車利用が多いと判断する立場で意見の衝突が見られた。中国・四国地方より

交通網の整備が先行している東北地方の事例からデータを得て判断することもできるが、東北地方で新幹線が開通した40年前とは社会の状況は大きく異なるのでそう単純にはできない。そこに現在の情報を加えて考察することができれば、思考に深まりが見られることにはないかと考えられる。いかにして深い思考に高めていくのかを検討し、授業実践を進めていくことが今後の課題と言える。

5. 参考文献

- 中尾尊洋(2022)教師の「やりくり」授業に対する意欲と「やりくり」授業を設計する意識との関連についての探索的検討.鳥取大学附属中学校研究紀要 pp.1-6
- 文部科学省(2018)学習指導要領解説 社会編.東洋館出版社
- 藤村宣之ほか(2018)協同的探究学習で育む「わかる学力」—豊かな学びと育ちを支えるために—.ミネルヴァ書房